

# Echardi «Intellectus Separatus»

高橋 克己

(高知大学人文社会科学系人文社会科学部門・人間文化学科)

Der „Abgeschieden Gaist“ Eckharts

Katsumi Takahashi

*Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät*

## **Abstractum ; Sommaire ; Zusammenfassung :**

Das neuplatonisch abgeschiedene „Eine“ (εν) und Aristotelis „aktueller, schaffender“ und „abgeschiedener Geist“ (χωριστὸς νοῦς), die die arabischen Denker miteinander in engen Zusammenhang brachten, münden in „daz eine, daz in im selben quellende ist [das Eine, das in sich selber quillt]“ („Predigt 28“) und die „lüter (reine) vernunft“ („Predigt 22“) in Eckharts deutschen Predigten (Werke I. S.322f./S.254f.). Darin kristallisieren sich auch Platons ideelle „lüterkeit“ („Predigt 28“: Werke I. S.322) und der „abgeschieden gaist“ (abgeschiedener Intellekt) des Aristoteles: „Dis luter bloss wesen nemmet Aristoteles ain ›was‹. [Dieses lautere, reine Sein nennt Aristoteles ein »Was«.]“ („Predigt 15“: Werke I. S.178f.) Hier geht es um die Bildung (informatio) von Platons „Idee“ (ἰδέα) und Aristotelis „Form“ (εἶδος) in beiderseitiger Übereinstimmung, nämlich „Platonis Aristotelisque concordia“: „Actio enim intellectus agentis est generare: istius autem informari (gebildet werden). Sunt autem vnum, quia intellectus materialis perficitur per agentem, & intelligit ipsum.“ („Aristotelis Opera cum Averrois Commentariis“ Venetiis 1562-1574. „De anima“ III.20 : 164E). Dies hat eine Entsprechung im „Musterstaat von Alfârâbî“: „Somit ist ein jedes [كل] derselben [من هذه] Substrate [موضع] der Himmelskörper] in seiner Form [الشكل] actuell [عقل] Intellect [بالعقل]. Es denkt in ihr (dieser Form) das Wesen [ذات] des [abgeschieden: المفارق] Immateriellen [d.h. Intellekt], von dem das Sein [وجود] dieses [himmlischen] Körpers [الجسم] ausgeht; auch denkt es das Erste [الاول].“ (Arabisch/ Deutsch nach Fr. Dieterici. Leiden. Brill 1895 und 1900. S.24/S.38: Kap.14). Die tätige Ursache ist der „abgeschieden immaterielle [المفارق] Intellect [عقل]“ (Eckharts „abgeschieden gaist“), dem Eckharts „luter bloss wesen“, nämlich das „abgeschiedene [المفارق] Intellektuelle [المعقول]“ entspricht: „But since thinking, free from all affection, is the property only of the intelligible thing absolutely separate [المفارق] from potentiality [اللقوة] and matter [المادة] [...]“ (Alexandros Aphrodisiensis „Abhandlung über die Theorie der Prinzipien des Alls“: „مقالة في القول في مبادئ الكل“ Islamic Philosophy, Theology and Science. Texts and Studies. Vol. 44. Leiden. Brill 2001. S.110f.) Im Urtext des Aristoteles finden sich „der abgeschiedene Geist [οὐ νοῦς χωριστός], der von Leiden freie [ἀπαθής] und unvermischt [ἀμηγής], der wesentlich [τῆς οὐσίας] in Wirklichkeit [ἐνεργείᾳ] seiende [εἴναι]“ in „Über die Seele“ (3.5: Aristotelis Opera edidit Immanuel Bekker 1831. 430A17f.) und das „irgendeine [τις] ewige [αἰδίος], unbewegte [ἀκίνητος] und abgeschiedene [κεχωρισμένη] Wesen [οὐσία]“ in „Metaphysik“ (12.7: 1073A4), das sowohl im von Aristoteles selbst als „Eines“ [εν] (12.8: 1074A36) angesehenen „unbewegt bewegenden Ersten“ [τὸ πρῶτον κινοῦν ἀκίνητον] (12.8: 1074A37) als auch im „reinen Denken“ d.h. „Denken des Denken“ [νοήσεως νόησις] (12.9: 1074B34-35) gipfelt.

Termini clavis : Hellenismus ; Platonismus ; Aristotelismus ; Neoplatonismus ; De intellectu et intellecto :

師Meisterエックハルト Eckhart は『説教 28』で、*Plátô, der grôze pfaffe* (偉大な神学者プラトーン) に関し、「彼は語る、純粹性 (lûterkeit) について、… 恒に留まっているのは、daz eine (一者 : τò ἕν) であり、そのもの自体で湧き溢れる者 (in im selben quellende) である。…」(Meister Eckhart: Werke I. 1107 Seiten / Werke II. 1026 Seiten. Bibliothek deutscher Klassiker 91/92. Bibliothek des Mittelalters. Bd.20/Bd.21. Frankfurt am Main. Deutscher Klassiker Verlag. 1993. Werke I. S.318) と語り、「—」(ἕν : eins) の中の「—」(ἕν : eins) である「一者」(τò ἕν : daz eine)、新プラトーン学派が説く究極の「根源一者 (das Ur-Eine)」(『悲劇の誕生』第1章・第6章・第22章・他 : Werke. Abt.3. Bd.1. S.26/S.47/S.137 etc.) を話題とする。この「一者」(τò ἕν : daz eine) をアリストテレス Aristotéλης は、「始源 (ἀρχή) 的な原因 (αιτία)」を探求する『形而上学』: *Tà Metà tὰ φυσικά* 1・3 (Aristotelis Opera edidit Immanuel Bekker 1831. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1960. 983A) で、「即ち、諸 *εἶδος* (形相) は他の [万有] 諸物にとって、τò τí ἐστίν (何であるか) の諸 *αἰτίον* (原因) であり、他方これら諸形相 (*εἶδος*) にとっては、一者 (τò ἕν) が [何であるか (τò τí ἐστίν) の原因 (αἰτίον) で] ある」【...】τὰ γὰρ *εἶδον* τοῦ τí ἐστίν (988A10 | 11) *αἴτια τοῖς ἀλλοις, τοῖς δ' εἶδεσι τò ἕν.*】(『形而上学』1・6 : 988A10-11) と説明している。当文面の「諸 *εἶδος* (形相)」の中の原因 (αἰτίον)、これはプラトーン Πλάτων 風に語れば、「諸 *ἰδέα* (理念)」の中の「理念」、即ち「善[美]の理念」: ή τοῦ ἀγαθοῦ *ἰδέα* (『国家』: Πολιτεία) 6・19: 希独 Platons Werke. «Œuvres complètes: Collection Budé 1955-1974[底本]». Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1971-1981. Tom.7. Part.1. p.138: Bd.4. S.542 : 508E) であるが、しかし他方アリストテレスは『[靈]魂論: Περὶ ψυχῆς』3・8 (432A1-2) で、「手が諸道具の道具 (οργανον) であり、そして νοῦς (叡智[・知性]) が、諸 *εἶδος* (形相) の *εἶδος* (形相)」(ή χεὶρ [1 | 2] ὄργανόν ἐστιν ὄργάνων, καὶ ο νοῦς *εἶδος εἰδῶν*) と述べるので、アリストテレスの場合はむしろ、τò ἕν (一者) でなく νοῦς (叡智[・知性]) こそが、「諸 *εἶδος* (形相) の *εἶδος* (形相)」と言うべきであろう。すると τò ἕν (一者) を νοῦς (叡智[・知性]) よりも重視するプラトーン学派は、何より『国家』で「善[美]の理念」(Tom.7. Part.1. p.138: Bd.4. S.542) が「οὐσία (真実在: 存在) の ἐπέκεινα (彼方)』【ἐπέκεινα τῆς οὐσίας】(509B: p.139: S.544) に探求される点を鑑み、プローティーノスを盾にアリストテレスを批判する。例えば彼の『Enneades: Ἐννεάδες』(Plotins Schriften. Bd.1-5. Philosophische Bibliothek. Bd.211-215. Hamburg. Felix Meiner 1956-1967) 5・1・10 に眼を遣ると、「οὐ (存在: 真实在οὐσία) の τò ἐπέκεινα (彼方) が τò ἕν (一者) で、… 次が οὐ (存在: 真实在οὐσία) と νοῦς (叡智[・知性]) で、第三が ψυχή ([靈]魂) の φύσις (本性) であり、…】【...】, ᾧς ἐστι μὲν τò ἐπέκεινα ὄντος τò ἕν, [...] , ἔστι δὲ ἐφεξῆς τò οὐ καὶ νοῦς, τρίτη δὲ ή τῆς ψυχῆς φύσις, [...]】(Bd.1. S.232) とある箇所が説明に役立ち、更に鏡くこう『エネアデス』5・1・9 で吟味される。「アリストテレスは後世、一方で τò πρῶτον (第一の者) を χωριστὸν (離在: 離れて在[る]) と、かつ νοητόν (叡智界: νοῦς 叡智[・知性]の世界) の者と言いかながら、他方それが自身を νοεῖν (思惟・知性認識する) と言うから、逆に (それを) 彼は第一の者と為していない。」【Αριστοτέλης δὲ ὑστερὸν χωριστὸν μὲν τò πρῶτον καὶ νοητόν, νοεῖν δὲ αὐτὸν ἔαντὸν λέγων πάλιν αὐτὸν τò πρῶτον ποιεῖ】(Bd.1. S.230)。話題の「それが自身を νοεῖν (思惟・知性認識する)」(νοεῖν δὲ αὐτὸν ἔαντὸν) とは、正に νοῦς (叡智[・知性]) に相応しい。ここでも『形而上学』12・9 (1074B34) の「思惟の思惟」(νόησιςの νόησις) が、換言すれば『形而上学』5・6 (1016B1) の現在分詞 νοοῦσα (思惟する) で表現された「思惟・知性認識する思惟 [行為]・知性認識[行為]」(ή νόησις [...] ή νοοῦσα) が、やはりアリストテレスの中心問題となっている。だがプラトーン学派が目指す τò πρῶτον (第一の者) たる τò ἕν (一者) は、それ自体 οὐσία (真实在: 存在) でもある当の νοῦς (叡智[・知性]) をも超え、その ἐπέκεινα (彼方) に探求される。さて『エネアデス』5・1・9 で取り出された χωριστὸν (離在: 離れて在[る]) が、ἐπέκεινα (彼方) を指すのであるが、これをエックハルトは abegescheidenheit (離在) と言う表現に結晶させ、論述『離在について』(Werke II. S.434-459) において冒頭 (S.434) から lûteriu abegescheidenheit (純粹な離在) を説き、彼がプラトーンに関し上記『説教 28』(Werke I. S.322) で析出した lûterkeit (純粹性) を「離在」に重ね合わせて、これを繰り返し説き (S.450)、更には前後を逆にして abegescheideniu lûterkeit (離在の純粹性) とも言い換え (S.452)、「この最高の離在、これが神自身である。」(S.458 : diu oberste abegescheidenheit, daz ist got selber.) と、論述を締め括っている。そして実は彼が考える「諸先師の最高アリストテレス」の着眼点は、『説教 15』で、

was (何: τι) とか「luter[純粹で]bloss[赤裸な]wesen[存在]」とか、「abgeschaiden[離在]の諸 gaist[神靈]」と語られる。「さあ [諸君]努めて注意してくれ、アリストテレースが『形而上学』と題した書物の中で、den abgeschaidnen gaisten [離在の諸神靈について語っている事を。… このluter[純粹で]bloss[赤裸な]wesen[存在]をアリストテレスは、一つのwas[何]と名付けている。」(Werke I. S.178)。話題の「離在の諸神靈」であるが、『形而上学』12・7-9 「思惟[行為] vόησις 自体は、最高善 ἀριστον 自体の[思惟であり]、この最上 μάλιστα [の思惟]は、最上の事の μάλιστα [思惟であり]、自身を思惟するのだ、叡智 νοῦς は、叡智界 νοητόν (叡智の世界)[へ]の関与に拠り。: ή δὲ νόησις ή καθ' | αύτήν τοῦ καθ' αύτὸν ἀριστον, καὶ ή μάλιστα τοῦ μάλιστα. | αύτὸν δὲ νοεῖ ὁ νοῦς κατὰ μετάληψιν τοῦ νοητοῦ (1072B-18-20 : 12・7 / 9 : 1074B33-35) / 故に[叡智 νοῦς が]自身を思惟する。… そして、この[叡智 νοῦς の]思惟[行為] νόησις が、νοήσεως νόησις (思惟 νόησις の思惟 νόησις: 純粹思惟[そのもの自体]) である。: αύτὸν ἄρα | νοεῖ, [...], καὶ ἔστιν ή νόησις νοήσεως νόη- | σις.] の文中で、「思惟 νόησις の思惟」に当たる「最高善 ἀριστον 自体の[思惟]」の τὸ ἀριστον 最高善を、『形而上学』12・10 の 1075A12 は τὸ ἀγαθόν 善 と共に κεχωρισμένον (離在したもの) と言い、12・7 の 1073A4 は οὐσία τις ἀτιδος καὶ ἀκίνητος καὶ κεχωρισμένη (永遠かつ不動かつ離在) の或る 実体 を語り、11・7 では当 実体 を χωριστή καὶ ἀκίνητος ([離在 かつ 不動]) (1064A35) と述べ、専ら 不動 の諸物のみを扱う μαθηματική [数学] と異なり、θεολογική [神学] (1064B3) こそが「離在 かつ 不動 の存在」 (1064A33-4) に係わる点を指摘している。こうして 形而上学 が 神学 と命名されるなら、例の「純粹で赤裸な存在」は最高善や善[美]と、「離在の諸神靈」は 実体 たる彼方の神々と読み替えられ得る。更にエックハルトは眼目を當の abgeschaiden (離在) に置き、アリストテレースの die höchst beweisung (最高の解釈) を示す。「vernünftig (叡智 [・知性的] 的) な人は、自己自身を vernünfteklich (叡智 [・知性的] 的) に理解し、自己自身において [既成の外から与えられる] あらゆる materien (様々な素材) と formen (様々な形) から abgeschaiden (離在: 離れて在る) である。」(『説教 15』: Werke I. S.176)。こうして彼はアリストテレースの形而上学と、プラトーンの 哲学 とを親密に結び付ける。これと異なり、『純粹理性批判』(初版 1781 年・再版 1787 年) 終結部におけるカントの様に、「アリストテレースが、Empiristen (経験論者達) の頭目と、他方プラトーンが Noologist en (知性 νόος [=知性 νοῦς] 論者達) の頭目と看做され得る。」(Kants Werke. Akademie-Textausgabe. Unveränderter Abdruck der von der Preußischen Akademie der Wissenschaften seit 1902 herausgegebenen „gesammelten Schriften“. Berlin. Gruyter 1968. Bd.3. S.551 : 再版 882 頁) となると、やたら両者の相違が際立ち分極する。

双方のうち一方を称揚する二者択一も伝統として有る。他方これを良しとせず、「プラトーンとアリストテレスの concordia (協和・一致)」を演説『人間の尊嚴について (De Hominis Dignitate)』(1486 年) で説いた文芸復興期のイタリア人 Pico ピーコも居る。普通は 折衷主義 (Συγκρητισμός: Syncretismus) と呼ばれる彼の主張はこうである。「私達が第一に提示したのは、プラトーンとアリストテレースの concordia (協和・一致) で、これは多数により今迄信じられつつも、誰によっても十分証明されなかつたことである。」(Giovanni Pico della Mirandola: »De Hominis Dignitate«, »Heptaplus«, »De Ente et Uno«, et »Scritti Varii a cura di Eugenio Garin. Firenze. Vallecchi 1942. p.144)。ここで concordia (協和・一致) が、a multis antehac credita (多数により今迄信じられ) と記されているが、同様の「多数により今迄信じられ」と言う事は二者択一のアリストテレース主義やプラトーン主義にも妥当する事であろう。とにかく彼の諸説混合を目指す 折衷主義 の成果を、続けて彼はこう述べる。「第二に、プラトーン哲学とアリストテレース哲学の両方において、私達自身で考え出したことを、更に七十二の新たな自然学と形而上学の教義として纏め上げた。」(p.146)。一応ピーコもエックハルトも、Platonis Aristotelisque concordia (プラトーンとアリストテレースの協和・一致) を説いているが、前者が「七十二の新たな教義」を案出し一般化しているのに対し、後者は「離在」(χωριστόν: abegescheidenheit) の一事に焦点を定めている。暫時一旦ピーコの時代 15 世紀に留まり、彼と異なり二者択一を迫る双方をも瞥見しておこう。両者の対立は、トルコ軍下 1453 年に陥落する東ローマ帝国領だった斜陽の東方ギリシア教会圏から碩学が多数イタリア訪問した Concilium oecumenicum (東西全キリスト教会合同公会議) の場、Ferrara フェラーラ (1438 年) と Firenze フィレンツェ (1439 年) で顕著となる。当時 1438 年、東ローマ帝国の政治権力が後 394 年、前 776 年より千年以上続いたオリュムビ

アーチνμπία 競技を禁止した後、創設後 900 年以上存続していたプラトーンの Ακαδήμεια 学園 (前 397 年 - 後 529 年) を強制閉鎖してから約 900 年後、当イタリア文芸復興の時代 1438 年、当時勃興し躍進中の都市国家フィレンツェで Accademia Platônica が再建される。この時フィレンツェ共和国が歓迎したプラトーン学派 Πλάτων プレートーン、「彼が解き明かしたプラトーン哲学、それはイタリア人達の耳には toute neuve encore (依然として全く新鮮) であった。」(Patrologiae cursus completus. Migne 1844-1866. PG = Patrologia Graeca. 1857-1866. Tom.160. 1866. Col.799-800) と、プレートーンに関する『フランス語で認められた既知事実その 2 (Notitia altera Gallice adornata)』(PG. Tom.160. Col. 793-806) に記されている事に誇張はないであろう。そして「結局その時多数の要望で、恐らく Còsimo メディチ Mèdici 自身の要望で、彼は小論『アリストテレスの学説とプラトーンの学説との差異について』(Différences entre les doctrines d'Aristote et celles de Platon) を物した。これは両学派間の論争の最初の口火であった」(PG. Tom.160. Col.799-800)。『プラトーン哲学とアリストテレス哲学の差異について (de Platonicæ et Aristotelicæ Philosophiæ Differentia)』(PG. Tom.160. Col.889-890) と羅訳されている原著『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする事柄について』(Περὶ ὀντὸν Αριστοτέλης πρὸς Πλάτωνα διαφέρεται) であるが、これに関しては哲学史家 Johannes Hirschberger が、その『哲学史 (Geschichte der Philosophie)』(Bd.1. 1948. 12.Aufl. / Bd.2. 1952. 11.Aufl. Freiburg i.B. Herder 1980) 第 2 卷で以下の説明を施している。「プレートーンは全く古典古代に没頭し、プラトーン主義の指導下でのギリシア宗教復興を夢見た。アリストテレスが (彼により) 拒否された理由は、Welt (世界) の永遠を説き、魂の個別人格上での不滅、及び神のVorsehung(摂理 : πρόνοια : プロノイア) を否認しているからで、反対にプラトーンは jenseitig (彼方 : ἐπέκεινα : supra) の世界、及び何より Schöpfergott (創造神 : 善[美]の神 δημιουργός ἀγαθός[«Τίμαιος» 29A] : Demiurgos agathos) を識るとの旨である。この『アリストテレスとプラトーンの哲学の差異』について、プレートーンは自分の著作を物した。」(Hirschberger „Geschichte der Philosophie“ 11.Aufl. Bd.2. S.11)。

プレートーンが当著作で重視している中で、「世界の永遠」と「魂の個別人格上での不滅」と「神の摂理」に関しては、双方のうち専ら一方だけに固有な特長とすることは恐らく困難と考えられるが、しかし「ἐπέκεινα (彼方 : supra : trans) の世界」、即ち現世から離在・超越した理念 (ἰδέα) 界と、世界の δημιουργός (造物主) の二点は、プラトーン哲学の中心に据えられて然るべきであろう。そして東西を問わず全体キリスト教思想圏にとどても、この二点こそ實に興味深いプラトーン哲学の双璧と考えられる。後者は『ティーマイオス』において、「この πᾶν (万有) の ποιητής (創出者) にして父】【ποιητής καὶ πατήρ τοῦδε τοῦ παντός】(28C : Tom.10. p.141: Bd.7. S.34) であり、「もし実際、一方でこの κόσμος (世界) が美しく、他方 δημιουργός (造物主) が善[美]なら、明らかに不滅のものに造物主は眼指を向いた。」(29A : Tom.10. p.141: Bd.7. S.34) 【 [...] Εἰ μὲν δὴ καλός ἔστιν ὅδε ὁ κόσμος ὁ τε δημιουργός ἀγαθός, δῆλον ὡς πρὸς τὸ ἀίδιον ἔβλεπεν [...]】と、τὸ ἀίδιον (不滅のもの) たる ιδέα (理念 : εἶδος 形相) に言及され、この「ἔργα (諸作品) の父、δημιουργός (造物主)」(41A : Tom.10. p.156: Bd.7. S.64) 【δημιουργός πατήρ τε ἔργων,】こそ、νοῦς (叡智) 界たる ιδέα (理念 : εἶδος 形相) 界の重鎮、つまり νοῦς (叡智) の中の Νοῦς (叡智) に他ならない。そして新プラトーン学派がプラトーンの対話篇『パルメニデス : Παρμενίδης : Parmenides』の全⑧仮定のうち格別重視した仮定①【137C-142A : Bd.5. S.232-245; Tom.8. Part.1. p.72-78】と仮定②【142B-155E : S.245-287; p.79-99】の τὸ ἔν (ト・ヘン : das Eine) と同一視した「善 (τἀγαθόν) の理念 (ἰδέα)」(『国家』6//7 : 505A/508E//517B) が、Νοῦς (叡智) たる δημιουργός (世界の造物主) をも含む「οὐσία (真实在・本質・実体 : オシ) の έπέκεινα (彼方)】【ἐπέκεινα τῆς οὐσίας】(509B: p.139: S.544) に遠望され、言わば δημιουργός (造物主) の Δημιουργός (造物主)、純粹造物主そのもの自体と看做され、χωριστόν (離在) の έπέκεινα (彼方) と Δημιουργός (造物主) が織り合わされる。この双方が相互浸透した「[始源]第一の神」にプレートーンは『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする事柄について』第 1 章の冒頭で言及している。「さて一方プラトーンが、[始源の]第一の Θεός (神)、万物の王 者を、νοῦς (叡智的) で如何なる場合も χωριστή (離在 : 超越の) οὐσία (真实在・本質・実体 : 存在οι) の[根源たる] δημιουργός (造物主)、この οὐσία (真实在) に起因する現世の全[世界・宇宙に相当する] οὐρανός (天界) の造物主として据えているのに対し、他方アリストテレスは神を

δημιουργός (造物主) と唯の一度たりとも言っておらず (『形而上学』第 12 書 1074A37 : τὸ πρῶτον κινοῦν ἀκίνητον : プロートン アキネートン キースーン ラムダ) と、第一の 不動 の 動者 / 1074-B34 : νοήσεως νόησις : 思惟 の 思惟 / 『ニーコマコス倫理学』 1177A : 究極のエウダイモニア / テオーレーティケー エルギア ノースイス ノースイス テレイアの幸福 … 観想的 θεωρητική [現実態]、その代わり現世の οὐρανός (天界) の始動因と神を説いているだけである (下記『天体論』283B.)。【Πρῶτον μὲν οὖν τὸν πάντων βασιλέα Θεόν Πλάτων δημιουργὸν τῆς νοητῆς τε καὶ χωριστῆς πάντη οὐσίας, καὶ δ’ αὐτῆς τοῦ παντὸς τοῦδε οὐρανοῦ τίθεται. Αριστοτέλης δὲ δημιουργὸν μὲν οὐδενὸς οὐδαμοῦ αὐτὸν φησιν εἶναι, ἀλλὰ μόνον τοῦ οὐρανοῦ τοῦδε κινητικόν】(PG. Tom.160. Col.889C)。絵画『アテナイの学院 : la Scuola di Atene』(1509 年 - 1510 年) の中で、創世論『ティーマイオス』を左手で垂直に持ち、右手で彼方・上方の理念界を示すプラトーンと、『Nikomachos倫理学 : Ήθικὰ Νικομάχεια』を左手で水平に持ち、右手で足下の大地を指すアリストテレスを並べて描いた Raffaello 同様、プレートーンも「叡智的で離在の真美在」と「現世の全天界」に分極化して、両者の相違を際立たせる所に力点を置いている。

以上のプラトーン学派に対抗して、早速 1455 年アリストテレス学派 Τραπεζούντιος トラペズーンティオスが反駁の書を提示する。その題名は『『プラトーンとアリストテレスの比較』(1455 年)、この比較でアリストテレスが、プラトーンより多くの点で一層優れて (PG. Tom.161. Migne 1866. Col.756/Col.757) いると contendit (彼は強硬に主張した)。… しかし反プラトーンの convicia (非難) と maledicentia (誹謗) で書が一杯なので、そこで当書を (かつてニーカイア Níκαια の大主教で後にローマ教会の枢機卿になった) ベーサリオーン Βησσαρίων が perlegit (吟味し)、著者の temeritas (無思慮) に permotus (攪乱され)、著者の mens (精神) を exsecuratus (呪い)、(1469 年) トラペズーンティオスの名は出さずに、『プラトーンの calumniator (曲解者) に抗する』四書で応えた。まずプラトーンの知恵と教義を、次にプラトーン著作集と私達の聖書との類似を、それから美風良俗と清廉潔白な生涯を彼は説明している。更に著者の inscītia (無知) をより一層表明するため彼は第五書を追加し、この中でプラトーンの『法律』(Νόμοι) に関し著者トラペズーンティオス自身の解釈における errores (諸過誤) や lapsus (諸失錯) を彼は拾い上げ、反駁し、正した。】(トラペズーンティオス - 既知事実 : Georgius Trapezuntius - Notitia) 【Comparationem Platonis et Aristotelis, qua Aristotelem Platone longo intervallo superiore (PG. Tom.161. Col. 756/Col.757) esse contendit, [...] Sed cum in Platonem conviciis ac maledicentia libri essent referti, ubi eos Bessarion perlegit, hominis temeritate permotus, et hominis mentem exsecratus, tacito Trapezuntii nomine in calumniatorem Platonis libris IV, respondit, quibus pri- mum sapientiam Platonis atque doctrinam, mox scriptorium ejus cum nostris similitudinem, tum probitatem morum vitamque integerrimam exponit; et, ut inscītiam hominis magis ac magis propalaret, quantum addidit, in quo Trapezuntii in interpretatione legum Platonis semel atque iterum ab eodem edita, errores ac lapsus collegit, refutavit et emendavit, [...]】時代の潮流は当 15 世紀から翌 16 世紀にかけプラトーン学派に有利に働く。その思想の息吹は殊に Sandro ボッティチエリ Botticelli の名画『Primavera : 春』(1482 年頃) から良く伝わって来る。この靈氣の源は主に、上記 Accademia Platònicaにおいて 1462 年以降その中心人物と成った Marsilio Ficino の『Accademia Platònicaにおける 1469 年の会食を舞台背景とした』Ἐρως (Amor) について (との副題を持つ)

プラトーンの「饗宴」への註解 : In Convivium Platonis de Amore Commentarium』(1469 年) や『プラトーン神学 : Theologia Platonica』(1469 年 - 1474 年 : 1482 年刊)、それに羅訳の『(成立 1 世紀 - 3 世紀の古代汎神論や 覚知主義等の遺産) ヘルメース文書 : Corpus Hermeticum』(1463 年 : 1471 年刊) や『プラトーン対話篇』(1463 年 - 1468 年 : 1484 年刊) 等で、この後 Raffaello が上記『アテナイの学院』(1509 年 - 1510 年) を創作した時には、Ficino の註解付羅訳の『Enneades』(1484 年 - 1492 年 : 1492 年刊)、プローティノスの弟子 Πορφύριος ポルピュリオスの残存文献と 5 世紀アカデーメイアの学頭プロクロス Πρόκλος の『神学綱要 : Πρόκλου διαδόχου Στοιχείωσις θεολογική』の羅訳 (1488 年)、『神秘神学論 : Περὶ μυστικῆς θεολογίας』(PG. Tom.3. Col.997-1064) や『神名論 : Περὶ θείων ὀνομάτων』(PG. Tom.3. Col.585-996) や『天上位階論 : Περὶ οὐρανίας οἰεραρχίας』(PG. Tom.3. Col.119-370) 等の『Διονύσιος [Dionysios] Αρειοπάγιτης 文書』の羅訳 (1492 年) などが揃っていた。これ程プラトーン学派関係の基本文献を 15 世紀後半に Ficino が熱心に翻訳した理由は、それ以前に羅訳が十分無かったからで

ある。実際エックハルトの利用出来た羅訳『プラトーン対話篇』は、400 年前後の Calcidius 訳解付『Τίμαιος : Timaios』前半 17A-53C 訳（公刊 9 世紀前半）と 12 世紀 Aristippus 訳『Μένων : Menon』と『Φαῖδων : Phaidon』で、彼の没後百年程 15 世紀前半に漸く Bruni 訳（『Ἐπιστολαῖ : 書簡』・『Φαῖδων : Phaidon』と『Συμπόσιον : 飲宴』終結部 215A-222B・『Γοργίας : Gorgias』・『Φωῖδρος : Phaidros』・『Ἀπολογία Σωκράτους : Sokrates の弁明』・『Κρίτον : Kriton』）が出る。但し、西暦 500 年頃に新プラトーン学派の影響下シリアで成立した『Dionysios 文書』は、860 年-862 年の Scotus エリウゲナ Eriugena 訳解付羅訳（PL 122. Col.125-284: Expositiones / Col.1029-1194: Versio Operum Dionysii Areopagitae）、更に当文書の新訳（1167 年イスラム教徒 Johannes サラケヌス Saracenus 罗訳）から、エックハルトはプラトーン哲学の息吹に触れた得たと思われる。結局プラトーンもアリストテレスも印刷されるのは 16 世紀で、最古の印刷本プラトーンは 1513 年 Venezia 刊 Aldina 版、今日の底本 Stephanus 版プラトーンは 1578 年 Paris 刊、印刷本アリストテレス刊 1531 年、今日の底本アリストテレスは本論がここで引用している 1831 年 Berlin 刊 Immanuel ベッカー Bekker 編集版 Aristotelis Opera であるが、羅訳アリストテレス著作類は、当時の僅かなプラトーンの羅訳とは正反対に、盛期スコラ哲学時代を経た 13 世紀後半には出揃っており、1260 年頃誕生のエックハルトは十分それら羅訳アリストテレスを活用出来たと考えられる。

新たな古代ギリシア文芸復興は、それだけでは無かった。実はプロクロスの『神学綱要』の抜粋が、9 世紀 Arabia 文芸復興の成果、アリストテレス著『純粹[محض]善[الخير]』[にに関して]の [في] [كلام] [عن] [الخير] における第一の師 [معلم] アリストテレス【第二の師 [الفارابي] (870 年頃-950 年)】の著書と成っている。これが 12 世紀スペインの都市 Toledo で『諸 *αἰτίον*[原因]論』(Liber de causis) と題されて羅訳され、13 世紀中葉には、『純粹 *ἀγαθὸν*[善]』の註解に関するアリストテレスの書』(Liber Aristotelis de expositione Bonitatis purae) と、アラビア語原典『純粹[محض]善[الخير] : *ἀγαθὸν* : 善[美]』の論』由來の題名で、エックハルトの先輩 Thomas Aquinas が居たパリ大学の授業科目に記載されていた。ここで興味深い点は、新プラトーン学派とアリストテレスとの両者を相互に、対立させ区別するよりも、むしろ織り合わせている事である。この線でエックハルトのアリストテレス理解も成立する。とにかくトマース (1225 年-1274 年) は当著に関し既に相当な見識を有しており、『諸原因論』[In Librum de Causis] (1269 年) で、まず『神学綱要』(elementatio theologica) に言及し (et in graeco quidem invenitur sic traditus liber procli platonici, continens ccxi propositiones, qui intitulatur elementatio theologica; in arabico [...]])、直後 de arabico translatum (アラビア語から翻訳された) 『諸原因論』(liber [...] de causis) を、videtur ab aliquo philosophorum arabum ex praedicto libro procli excerptus (アラビアの哲学者達の誰かによる前述のプロクロスの著書からの抜粋と思われる) と指摘する (Thomae Aquinatis Opera omnia. Vol.1-Vol.7. Stuttgart [Bad Cannstatt] Frommann-Holzboog 1980. Vol.4. «Commentaria in Aristotelem et alios». Paginae 507-520. «In librum de causis». Pagina 507 左段)。当然エックハルトも当『諸原因論』に関しトマースの「抜粋」説を認め、結局プラトーン学派の成果と看做したと考えられる。更に時代の要請は liber excerptus (抜粋文書) だけに満足せず、1268 年にはプロクロスの羅訳『神学綱要』(Elementatio theologica) も公刊される。やがて『神学大全』(1265 年-1274 年) の著者トマースが没するのに対し、1260 年頃に誕生したエックハルトは、新たな時代の成果である新プラトーン学派の著作を旺盛に取り込んでゆく。

但し、アリストテレスに関する限り、エックハルトは盛期スコラ哲学時代 13 世紀迄の伝統的理義に留まり、15 世紀以降プレートーンの小論『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする事柄について』やラファエロの絵画『アテナイの学院』に現れた相互対立分極化とは反対の道を歩む。そして更に啓蒙期 18 世紀には、「アリストテレスが、Empiristen (経験論者達) の頭目と、他方プラトーンが Noologisten (知性 νόος [= 知性 νοῦς] 論者達) の頭目と看做され得る。」 (Werke. Bd.3. S.551 : 再版 882 頁) と、『純粹理性批判』でカントにより一層鮮やかに色分けされる。だが全体エックハルトが敢て「知性論者」として敬意を払った「諸先師の最高 Αριστοτέλης アリストテレス」 (Werke I. S.178) も生き続けている。例えば上掲『哲学史』(1948 年/1952 年) 第 1 卷でヒルシュベルガーは、まず同時代の専門家 J. ツュルヒャー Zürcher 著『アリストテレス、著作と精神 (Aristoteles, Werk und

Geist)』(1952年)から、「ツュルヒャーによれば、アリストテレス著作集の中でなお真正と言えるのは、プラトーン哲学である。もっとも最早それは全体の約4分の1しか[残ってい]ないであろう。残り全部は Θεόφραστος (Theophrastos) の加筆であり、彼が30年間自分の師の手稿類と取り組み、その際それらを抜本的に変更した、と言うことである。」(Bd.1. S.160)と引用した後、更に自説もこう述べる。「アリストテレスは彼のプラトーン駁論にもかかわらず、プラトーン主義から絶縁していない。彼の認識論同様、彼の形而上学でも又、彼は当初プラトーンに背を向けるが、しかし最後には再び彼に復帰するのである。」(Bd.1. S.191)。

大雑把な時代の趨勢は、盛期スコラ哲学時代13世紀に頂点をなすアリストテレス熱が次第に冷め、詩歌や芸術の花咲く文芸復興期14世紀以降プラトーン熱が上がる所にある。旧時代に支配的だった国際語ラテン語に代わり、この新時代の成果は多彩な母国語で現れ、ダンテの『神曲』(1307年—1321年)、エックハルトの『[ドイツ語]説教』(1314年頃—1326年頃)、René デカルト Descartes の『方法序説 : Discours de la méthode』(1637年)という姿を取る。こうして時代の思潮はアリストテレス文芸復興の盛期スコラ哲学時代13世紀に別れを告げ、Accademia Platònica創設やプレートーン來訪(1438年)とプラトーン学派関係文献Ficino羅訳(1463年—1492年)の15世紀を目指す。1329年彼に異端宣告を発したローマ法王は、先述の如く、新時代の成果『神曲』(1307年—1321年)で詩聖に告発され、「だが汝、[後に取り消し手数料を徴収する目的で]専ら帳消しにする為に[破門や懲戒を]記帳する者よ、」と糾弾されており、実際エックハルトの死後ローマ法王が書いた国際語ラテン語の異端宣言文より、母国語イタリア語で高唱された『神曲』の文面の方が、遙かに心に深く響き渡った事は確かである。またデカルトが『方法序説』末尾(Oeuvres de Descartes. Paris. Cerf 1897-1913. Tom.6. Pag.77)で、「わが師達の言葉である羅典語よりも、むしろ自国語であるフランス語で私が書いている」ことの根拠として、raison naturelle toute pure ([自然本性に基づく]生来の全き純粹[pure]理性[raison]) を挙げているのも、エックハルトの『[ドイツ語]説教』におけるlütter vernunft (純粹叡智[・理性])との関連で興味深い。このように世相は遷り變って往くのであるが、しかしエックハルトのアリストテレス像は、先輩スコラ学者達のそれと比べて、それ程大きな相違は無かったと思われる。実際それは深く形而上学の伝統に根差しているので、その継承発展は言わば持続維持を意味している。ここで保持されるのは、上記Hirschbergerの『哲学史』の言葉なら、「プラトーン哲学」とか「プラトーン主義」であり、これが実は9世紀アラビア文芸復興よりイタリア文芸復興に至るまで連綿と形而上学の尾根を形成している。

新プラトーン学派プロクロスの『神学綱要』が、9世紀アラビア文芸復興でアリストテレス著『純粹善の論』へと変貌し、12世紀『諸原因論』(Liber de causis)と題して羅訳され、更に『諸原因論』が13世紀スコラ哲学盛時、『純粹善』の註解に関するアリストテレスの書として出回る。この様な新プラトーン学派とアリストテレス哲学との織り合わせは、当『純粹善 [諸原因論]』と共に双璧為すアラビア經由12世紀羅訳の『アリストテレス神学』(sapientissimi philosophi Aristotelis Stagiritae theologia : 最高の知恵を有した[Mακεδονία(Makedonia)の]Στάγιρος(Stagiro)市の哲学者アリストテレスの神学)にも認められる。これが実は『Enneades』第4巻—第6巻の翻案であり、この事は暗黙の了解であろうが、これを敢て『アリストテレス神学』と命名してある所に、Platonis Aristotelisque concordia (プラトーンとアリストテレスの協和・一致)が窺い知られる。この羅訳『アリストテレス神学』の形を取り新プラトーン学派プロティノスの思想が中世末期、エックハルト達スコラ学者の知識に流れ込む。但し、この第4巻—第6巻には、上記アリストテレス批判(『エネアデス』5・1・9)、「アリストテレスは後世、一方で第一の者を離在と、かつ叡智界の者と言ひながら、他方それが自身を知性認識すると言うから、逆にそれを彼は第一の者と為していない。」【Αριστοτέλης δὲ ὑστερὸν χωριστὸν μὲν τὸ πρῶτον καὶ νοητόν, νοεῖν δὲ αὐτὸν ἐαυτὸν λέγων πάλιν αὖ οὐ τὸ πρῶτον ποιεῖ】(Bd.1. S.230)が有るが、これがアラビア語の翻案に欠落するのは自然の成り行きであろう。しかし他方プラトーン主義そのものの自体は当の翻案にも豊富に盛り込まれている。『アリストテレスのアリストテレスの[アリストテレスの]神学の書[كتاب][الفلوجياب]』(Dieterici編亜独 Die sogenannte Theologie des Aristoteles. Leipzig. Hinrichs 1882年[ア語原典] ; 1883年[獨訳] : 復刻 1969年; Friedrich Dieterici „Die Philosophie bei den Arabern im X. Jahrhundert n. Chr.“ Bd.1-14. 1958-1986. Hildesheim. Olms 1969. Bd.11[ア語原典] ; Bd.12[獨訳])は第1章で、【神々しく[اللهم]氣高い[الشريف]】[プラトーン

【アリストテレス】(原典9頁18／独訳10頁)【Der erhabene göttliche Plato】を話題とする前に、紀元前500年前後のソクラテス以前の思想家 Ἡράκλειτος[Herakleitos]を彼の先駆者、即ち理念*ἰδέα*探求のNoologist[叡智voūς論者]として重視している。【かつ私は想起した[トカクタガツカル]、(かの事を)【عند】[インダ]、かの【ذاك】[ザーカ]Herakleitos(の事を)【أوندكتر】[オントクト]、即ち彼は【فانه】[アマラ]命じた[ أمر]、追求を【بالطلب】[タラブ・ビーパス]、かつ【أو】[ワ]探求を【البحث】[アーバス]、(魂の本質)に関する【عن】[アン]、本質【جواهر】[ジヤウハル]、【نفسي】[ナフス]魂の【النفس】[アルネス](本質に関する追求かつ探求を)、[3|4]かつ【أو】[ワ]【الحرص】[ヒルス]熱望を【الم命】[アマラ]、(命じた)、(上昇)への【على】[アリ]熱望)、上昇【الصعود】[スカウード]への熱望)、(かの世界)への【إلى】[アリ]、かの【ذلك】[ザーリカ]世界【العالم】[アーラム]、崇高な【الشريف】[シャリーフ]至高の【العلى】[アラウ]世界への上昇への熱望を彼は命じた)…】(原典9頁3-4／独訳9頁)【Hierbei erinnerte ich mich an Heraklit. Der befahl ja nach der Substanz der Seele zu suchen und zu forschen [...]】(第1章)。

これは既に『エネアデス』5・1・9の上記アリストテレス批判の直前で、プローティーノスが「ヘーラクレイトスも一者を永遠で、叡智voūς界[叡智界]の者であることを知っていた」【καὶ Ἡράκλειτος δὲ τὸ ἐν οἰδεν αἴδιον καὶ vonτόν (Bd.1. S.230/S.231) Auch Heraklit hat gewußt daß das Eine ewig und geistig ist,】と述べている事も背景にあるが、ここで例のラファエロ作『アテナイの学院』を想い起こすと、彼が尊敬していた『モナ・リザ : Monna Lisa』(1500年-1510年頃)の画家、Vinci村のLeonardo自身が描いた自画像の風貌を彷彿とさせるプラトーンの前方で、当ヘーラクレイトスがMichelangelo自身、或いは彼が礼拝堂 Cappella Sistinaの天井画に描いたRodin作『考える人 : Le Penseur』(1880年)の原型エレミアを偲ばせる姿で、深く物思いに耽り思索しており、他方アリストテレスの風采は上がらない。ここで重要な点は、当絵画がプラトーン中心に描かれている事、および彼の理念*ἰδέα*追求・探求の先駆者としてヘーラクレイトスがミケランジェロを偲ばせ厳然と控えている点である。【言った[قال] [11|12] プラトーンが【أفلاطون】(アリストテレス)、即ち【إن】(靈魂の)解放【اطلاق】(解放)は、(足枷)からの【من】( من)】(原典10頁11-13)【Dann sagt Plato, dass die Befreiung der Seele von ihrer Fessel nur in ihrem Herausgang aus der Höhle dieser Welt und in der Erhebung zu ihrer Geistwelt beruhe. [...]】(『アリストテレスの書』アリストテリース著、ウスルージヤー翻訳、第1章)。上記『純粹善の論』、別名『諸原因論』(Liber de causa)、即ち『純粹善』の註解に関するアリストテレスの書でも、プラトーン哲学で最も重要で再三話題の「善 (ἀγαθόν) の理念 (ἰδέα)」:『国家』6//7 : 505A/508E// 517B : Platons Werke. Bd.4. S.530/S.542/S.562; Tom.7. Part.1. p.132/p.138/p.149】が「純粹善」(Bonitas pura)と命名されている。これをアリストテレスは「善 そのものの自体 (ἀγαθὸν καθ' αὐτό)」(996A24)とか「善 (ἀγαθόν) の本性 (φύσις)」(996A23)と『形而上学 : Τὰ Μετὰ τὰ φυσικά』3・2で述べ、更に『ニコマコス倫理学』1・7で「探求される ἀγαθόν (善) : τό ζητούμενον ἀγαθόν」(1097A15)と「諸 τέλος (目的[因]) : τὰ τέλη」(1097A26)を踏まえ、「最高善 (ἀριστον) が、τέλειον τι (何らかの究極) [目的因] と思われる。: τὸ δ' ἄριστον τέλειον τι φαίνεται.】(1097A28)と自説を開陳している。当然この「最高善 ἄριστον 自体の [思惟]」が νοήσεως νόησις (思惟 νόησις の思惟 νόησις : 純粹思惟[そのもの自体])に帰着する事は、『形而上学』12・7と12・9で確かめられる。「思惟 [行為] νόησις 自体は、最高善 ἄριστον 自体の [思惟 であり]、この最上 μάλιστα [の思惟] は、最上の事の [思惟 であり]、自身を思惟するのだ、叡智voūςは、叡智界 νοητόν (叡智の世界) [~] の関与に拠り。」(1072B18-20 : 12・7/9 : 1074B33-35)「故に [叡智voūς が] 自身を思惟する。… そして、この [叡智voūς の] 思惟 [行為] νόησις が、νοήσεως νόησις (思惟 νόησις の思惟 νόησιス : 純粹思惟 [そのもの自体]) である。」(『形而上学』第12書)。

話題の「純粹 ἀγαθόν (善)」を『アリストテレスの書』アリストテリース著、ウスルージヤー翻訳、キターブでは、イフラートゥーン【アリストテレス】が語る。【… 第一の【الاول】[アッワル]創造者は【البارى】[バー]、… 叢知的 [العقلية]諸存在者 [الأيات]の原因 [الأسباب]】(アリストテレス著、ウスルージヤー翻訳、第1章)であり… 純粹な [المحض] 善 [الخير] であり、… (S.12/S.13)… 又 [و] それ [هو] は創造者 [البارى] であり、これは [الذى] である… (即ち) 純粹な [محض] 善 [الخير] である】(原典12頁-13頁: 第1章)。この「第一の創造者」である「純粹 [المحض]」善 [الخير] を『Aristoteles 神学』第10章では、【純粹 [المحض] 一者 [الواحد]】(原典136頁

／独訳 137 頁)【Der Eine, der Reine!】と呼ぶ。文法上の性が男性と女性のみでアラビア語には中性が無い故、中性は男性に組み込まれる結果、独訳も男性を示しているが、これが第 1 章(独訳 13 頁)の中性【das reine Gute : خير ممحض】と同一であり、本来プラトーン学派で重視された上記の中性の τὸ ἔν (一者 : das Eine) である点を留意する必要がある。そして亜語原典の表現で目に付くのが「純粹」(محض)と云う言葉で、プラトーンの「善」の理念(ἡ τοῦ ἀγαθοῦ ιδέα) が「純粹善」(خير ممحض)、新プラトーン学派の「一者」が「純粹一者」(الواحد الممحض)となる。これは後世エックハルトが「純粹 叡智」(lütter vernunft)『説教 22』(Werke I. S.254/258)とか「純粹 叡智」(intellectus purus)『ヨハネ福音書註解』第 38 節(Werke II. S.524)を、また論述『離在について』で「純粹な離在 : lüteriu abegescheidenheit」(S.434)とか「離在の純粹性 : abegescheideniu lüterkeit」(S.452)を語る時の背景として興味深い。同じ事を語る場合に表現が変わる点では、既に留意している「νοῦς χωριστός (nous chooristos) : 離在 χωρίς の叡智 νοῦς」(アリストテレス『[靈]魂論』3・5 : 430A17)も、スコラ哲学盛期 13 世紀には「能動[知性・]叡智」(intellectus agens)と言う形で議論的となる。トマースも『[アリストテレスの]靈魂論の諸書への註解 : In Libros de anima』(1268 年)第 3 書・第 10 講(Opera omnia. Vol. 4. «Commentaria in Aristotelem et alios». Paginae 364-365)で、またグリュンディヒ Gründig のエックハルト Eckhart(註:Eckharts Werke I. S.849)も『能動[知性・]叡智 と可能[知性・]叡智 : Von der wirkenden und möglichen Vernunft』(1302 年-1323 年頃)でこれを扱っている。改名の源は紀元 200 年頃活躍のアリストテレス学者、トルコ南西部 Kariā の都市 Aphrodisias 出身の Αλέξανδρος(Alexandros)[Αλέξανδρος ὁ Αφροδισιεύς]で、彼が彼自身の『[靈]魂論 : Περὶ ψυχῆς』(Commentaria in Aristotelem Graeca. Supplementum Aristotelicum. Vol.II. Pars I. Alexandri Aphrodisiensis De Anima Liber cum Mantissa. Berlin. Reimer. 1887. 1 頁-186 頁)中の『叡智論 : Περὶ νοῦ』(106 頁-113 頁)で、「νοῦς χωριστός : 離在 χωρίς の叡智」(89 頁 11) や「ό θύραθεν νοῦς : 外からの叡智」(111 頁 34 : θύραθεν : deforis : 下記『動物生成論』2・3 : 736B28) や「神的な叡智 : ο θεῖος νοῦς」(112 頁 27)を、「能動的」創出的 [=創出者 ποιητής] の叡智」(107 頁 29 : νοῦς [...] ο ποιητικός / 108 頁 22 : νοῦς ο ποιητικός / 108 頁 29 : ποιητικός νοῦς) と命名し【Eduard Zeller „Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung“ III.1. Leipzig. Fues 1880. S.789-801】【der „tätige Verstand“(νοῦς ποιητικός, wie ihn Alexander von Aphrodisias später nennt) : Hirschberger『哲学史』Bd.1. S.180】、これが「能動[知性・]叡智」の元となる。

この点エックハルトは「νοῦς χωριστός : 離在の叡智」の方を、自分の根本概念 abegescheidenheit(離在)に結びつけ、その内容を深め一層プラトーン哲学に近付け、更に『[靈]魂論』3・4(429B22-24)に引用されたアナクサゴラース Αναξαγόρας の νοῦς(叡智)を、上記『ヨハネ福音書註解』第 38 節で「純粹叡智 (intellectus purus)」と名付け、「何者とも共有し無い(nihilo nihil habens commune)」(Werke II. S.524)【μηθενὶ μηθὲν(429B23/24) ἔχει κοινόν】と「離在」を力説する。実際アナクサゴラース自身『断片 12』で、νοῦς(叡智)を「何者とも混じらず … (μέμεικται οὐδενὶ [...])』【[靈]魂論』3・4 : ἀμιγῆ(混じり気なく純粹) εἶναι, ὡσ- (429A18/19) περ φησὶν Αναξαγόρας [...]】、… καθαρώτατον(最も純粹なもの)』と叙述している(H. Diels 独訳・W. Kranz 編 „Die Fragmente der Vorsokratiker“ 1903. 6.Aufl. 1951-1952. Bd.2)。話題の『[靈]魂論』3・5でアリストテレスは、まず「質料」(ὕλη) (430A10)として「万有諸物(πάντα)が δύναμις(可能態)に」(430A11)在る反面、この「この質料に対する τέχνη(学芸・技術)の様に、万有諸物を ποιεῖν(創出する)点で、αἰτιον(原因)がまた ποιητικό ([能動的] 創出的)である」(430A12-13)と述べ、質料(ὕλη)と、質料に εἶδος(形相)を付与する[能動的] 創出的な原因、この双方の相互関係を留意し、これを ψυχή([靈]魂)に宿る νοῦς(叡智[・知性])に関しても当て嵌める。すると「万有諸物に成る点での[質料]の様に可能態に在る受動的な」そうした νοῦς(・知性)(τοιοῦτος νοῦς) (430A14)と、「φῶς(光)の様に、… 万有諸物を ποιεῖν(創出する)点での[νοῦς(叡智[・知性])]」(ο δὲ τῷ πάντα ποιεῖν [...] οἷον τὸ φῶς : 430A15)と、に二分される。光の比喩が、「δύναμις(可能態)に在る[暗くて見えない]諸 χρῶμα(色彩)を、[可視の]ἐνέργεια([能動]現実態)に在る諸 χρῶμα(色彩)に、φῶς(光)が ποιεῖ(創出する)」(τὸ φῶς ποιεῖ τὰ δυνάμει ὄντα χρώματα ἐνέργειά χρώματα. : 430A16-17)と語られ、この直後すぐ「又この様な νοῦς(叡智[・知性])は、[ψυχή([靈]魂)から] χωριστός(離在的)であり、ἀπαθής(非受動的)であり、ἀμιγῆς(非混合で純粹)

であり、その οὐσία (本質 [・実体・実在・存在]) は ἐνέργεια ([能動]現実態) である。」(καὶ οὗτος ὁ νοῦς χωριστὸς καὶ ἀπαθής καὶ ἀμηχάνης τῇ οὐσίᾳ ὡν ἐνεργείᾳ。: 430A17-18) とあり、「νοῦς χωριστός (nous chooristos) : 離在χωρίς の叡智νοῦς」が登場する (アリストテレス『靈魂論』3・5 : 430A10-25)。文脈上 χωριστός (離在的) νοῦς (叡智[・知性]) が、ποιεῖν (創出する) 点で ἐνεργείᾳ ([能動]現実態に) 在り、ἀπαθής (非受動的) である事は明らかなので、アリストテレスのアレクサンドロスが敢て「創出的 ποιητικός 収智νοῦς」と言わなくても、当 νοῦς (叡智[・知性]) の眼目が ποιεῖν (創出する) ἐνέργεια ([能動]現実態) に在る事は疑い得ない。

要はどの言葉に力点を置くかで、西欧ラテン中世は ἐνέργεια ([能動]現実態: actus) に着眼し、本来 actus ([能動]現実態) は動詞[不定詞]agere (実行・活動する) の完了[過去]分詞[男性・単数] actus に呼応するので、この動詞の[現在]能動分詞agens (活動する・能動の) を形容詞として名詞 intellectus (叡智[・知性]) に附し、「能動[知性・]叡智」(intellectus agens) として使うことに成了。そして実は既に当着眼点を、アラビア文化圏における第二の師 (الفارابي al-Farabi[870 年頃-950 年]) が、«الواحد» [一者] を【... «der Eine» [...] ein actueler Intellect】と語ることによって明示している (原典 Fr. Dieterici 編 1895 年/独訳 1900 年. Leiden. Brill : 復刻 Hildesheim. Olms 1985 年)。これは 930 年頃の al-Farabi 著『الفاضلة』[優良] 〔[都市の]都民の] [諸見解: 諸見解] 〔[論文] رسائل〕 (原典 V 頁に „Ueber die Ansichten der Bewohner der Vorzugsstadt“ / 独訳題名: Der Musterstaat von Alfârâbi : 模範都市国家) 第 5 章からで、その第 14 章では【これら[ هذه] (諸天体[جسام]の諸基体[أجسام]) の中の[إن] 各々一つ[ واحد]】は、その形相に拠り [ بمصوريته] ([能動]現実態の[ على] 収智[عقل]) で在り、又 [ هو] (各基体[أجسام]) は思惟する [ يعقل]、[12|13] 形相に拠り [ بها]、その [ ذلك] 天体[جسم] の存在 [ عنده] がそこから由来する離在[叡智] [ المفارق] の本質 [ ذات] を、又 [ يفكرون] (思惟する) [ يعقل]、第一者 [ لا ول] を。】 (原典 24 頁 12-13)。ここで離在[叡智]を der Immaterielle (非質料  $\deltaύλη$  的な者) と翻訳 (独訳 38 頁) する理由は、離在[叡智]が、可能態に在る受動的な [ المادة] : 質料 [مادّة] (原典 24 頁 18) から自由な  $\dot{\epsilon}\pi\kappa\epsilon\iota\alpha$  (彼方) に超越し、【صور】: 諸形相: 諸形相 [الصور] が、可能態に在る故に超越し、【الحقيقة】: 真理 [الحقيقة] (原典 24 頁 7) に溢れた [ المفارق] : 離在 [ المفارق] の思惟対象 [المعقول] である叡智界 [理念界] に在る故である。これを上記アリストテレスのアレクサンドロス (著のギリシア語原典の失われた亜訳『万有 (πᾶν 万有 κόσμος 宇宙) の諸原理 (ἀρχαί: 諸 ἀρχή) 原理: 諸 ἀρχή) 原理』 (الاسكندر) に関する論文』 (مقالة في القول في مبادئ المفارق) と記している。

更に『アリストテレス「形而上学」註解』 (Commentaria in Aristotelem Graeca. Vol.I. Alexandri in Metaphysica. Berlin. Reimer. 1891) 694 頁で、アレクサンドロスは「当叡智は即ち想念界の形相を摘み、かつ質料から現実態の形相を離在させ [38/39] かの叡智界を創出し、自身は現実態の叡智と成る。」【ό γὰρ νοῦς τὸ [37/38] εἶδος τοῦ νοούμενου λαβὼν καὶ τῆς ψύχης αὐτὸν χωρίζων κατ' ἐνέργειαν [38/39] ἐκείνο τε νοητὸν ποιεῖ καὶ αὐτὸς κατ' ἐνέργειαν νοῦς γίνεται。】とあり、離在 (χωρίς) の形相に現実態の叡智が親和する一方、他方アリストテレス『靈魂論』3・5 の上記「万有諸物に成る点での[質料]の様に可能態に在る】 そうした叡智 (τοιοῦτος νοῦς)」 (430A14)、即ち「受動的な叡智 (παθητικός νοῦς)」 (430A24) は軽視される。これを 12 世紀 Averroës [ibn-Rushd: ابن رشد] (1126 年-1198 年) は批判し、『靈魂論』書の大註解: «Grand Commentaire sur le Traité de l'Âme d'Aristote» en deux volumes. Tunis. Carthage. Académie Tunisienne des Sciences des Lettres et des Arts. *Beit Al-Hikma*. Vol.2. Texte restitué à l'arabe par B. Gharbi de l'Université de Tunis. 26 頁-329 頁: 羅訳 Aristotelis Opera cum Averrois Commentariis. Venetiis apud Iunctas 1562-1574. 復刻. Frankfurt a.M. Minerva 1962. 14 Vol. Suppl.2. Folio 1A-204F; Averrois Cordubensis Commentarium Magnum in Aristotelis De Anima libros. Massachusetts. Cambridge 1953. Pagina 3-Pag.546) 3・19 末尾 (並 267 頁: 羅 Folio 162E; Pagina 443) で、「[アリストテレスの]アレクサンドロス よりもし当質料的叡智

インテレクトゥス マーテリアリス (العقل الهيولي : intellectus materialis) 【νοῦς ύλικὸς καὶ φυσικός : 上掲 E.ツェラー『ギリシア哲学…』III.1.796 頁】という名がアリストテレス (أرسططليس) の場合、唯準備 (التهيئة : præparatio) を意味するだけなら、どうして彼はこれと[創出的]能動叡智 (العقل الفاعل : intellectus agens) の一致と差異の諸点を示し、両者の当比較 (『靈魂論』3・5) を為したのであろうか? と問い合わせ、更に『靈魂論』書の大註解3・20 (272 頁 : Folio 164E ; Pagina 451) で、「他方双方が一者である事に関しては： وأما كونهما واحدا (Sunt autem vnum,)」、即ち (فلان : quia)、質料的叡智 (العقل الهيولي : intellectus materialis) は、能動 [叡智] により (بالفاعل : per agentem)、[現実態へと] 完成され (perficitur)、且それ [能動叡智] を知解する (et intelligit ipsum.)。」と結論を述べる。

この眼目は、人間の叡知的諸力が遂には能動叡智の現実態へと昇華され、根源の叡智たる一者に回帰してゆく事と考えて良いであろう。ファーラービーの『優良都市の住民の見解に関する論文』も同旨で、[質料的叡智] (الميولي : intellectus materialis) は、能動 [叡智] により (بالفاعل : per agentem)、[現実態へと] 完成され (perficitur)、且それ [能動叡智] を知解する (et intelligit ipsum.)。』と結論を述べる。

ここで見事に纏め、この際当著で彼は先輩 al-Farabi が『都市論』や後述『叡智・知性』に関する論文で析出した【能動叡智】 (العقل الفاعل : مفارقة) を重視している : [intelligentia agens : بالقوله] (Avicenna latinus. Édition critique publiée sous le patronage de l'union académique internationale. Liber de philosophia prima sive Scientia divina. Leiden. Brill. I-IV. 1977/ V-X. 1980/ Lexique 1983 : 本文 160/364/368/457/462/475/476/484 頁 / 辞典 161/317 頁)。また『都市論』は Aristoteles の対概念、【Materiale】 [ماده] [Material] [マテリアル] [و صوره] [و صورة] [with 形相] (原典 5 頁 20-21 / 独訳 7 頁) 【Stoff und Form】、【قوله】 [قوله] [بالقوله] [with 可能態] : 【العقل الفاعل】 [بالفعل] [with 現実態] : 【العقل الفاعل】 [بالفعل] (原典 5 頁 12) と、【能動】 [بالفعل] [with 現実態] : 【العقل الفاعل】 [بالفعل] (原典 24 頁 12) を基軸に論述が展開しているが、しかし他方その題名にある (المدينة : 都市) が、その二様の独訳、Stadt (都市) と Staat (国家) の示す如く、アーティナや Bagdâd (バグダード) の類を指し、その都市国家の制度 (Πολιτεία : Politeia) を、当然プラトーンの『国家』 (Πολιτεία) を念頭に置いて扱っている点からも、ここに「プラトーンとアリストテレスの協和・一致」を見逃すことが出来ない。その眼目は、【能動】 [بالفعل] [with 現実態] 在する (بالفعل) の相で、アリストテレスの νοῦς χωριστός (離在の叡智) が 【能動】 [بالفعل] [with 現実態] : 【عقل】 [بالفعل] [with 可能態] (原典 24 頁 12) を強調している。それもその筈、彼の論拠は、アリストテレスの『アリストテレスのアリストロジヤ』 [كتاب أرسططليس] [كتاب أثولوجيا] [神学の書] に基づき、これがアラビア世界ではアリストテレス著であること疑い無しであったからである。まず「世界の永遠」 (ウーラノス) に関し述べた『天界論』 1・10-2・1 (279B4-284B5) でアリストテレスが、「… 生成 [・誕生] したのでもなく、この 全 天界 は、また消滅不可能、… そうではなく唯一で 永遠、始源も 終焉も 持たぬ、全 永劫より、かつ自身の中に 無限 の時間を有し内包している。」 (2・1 : 283B26-29) [...] οὐτε γέγονεν ὁ πᾶς οὐρανὸς οὔτ' ἐνδέχεται | φθαρῆναι, [...], ἀλλ' ἔστιν εἰς καὶ | αἴδιος, ἀρχὴν μὲν καὶ τελευτὴν οὐκ ἔχων τοῦ παντὸς αἰώνος, | ἔχων δὲ καὶ περιέχων ἐν αὐτῷ τὸν ἄπειρον χρόνον, [...]】、と記した所を al-Farabi は留意しながらも (S.36f.)、やはりアリストテレス『神学』を楯に取り、プラトーン同様「アリストテレスが、この Welt aus dem Nichts (世界

実際 al-Farabi には論文『プラトーンとアリストテレスの調和』 (Die Harmonie zwischen Plato und Aristoteles : Fr. Dieterici „Alfârâbi's philosophische Abhandlungen aus dem Arabischen übersetzt“ Leiden. Brill 1892. S.1-53) があり、当論で彼は上記プレートーン著『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする事柄について』の要点 (上掲ヒルシュベルガー『哲学史』 Bd.2. S.11)、「アリストテレスが (彼により) 拒否された理由」、即ち「世界の永遠を説き、魂の個別人格上での不滅、及び神の摂理を否認している」事、「反対にプラトーンは ἐπέκεινα (彼方) の世界、及び何より創造神デミウールゴスを識るとの旨」を留意し、悉く前者が後者と同意見である点を強調している。それもその筈、彼の論拠は、アリストテレスの『アリストテレスのアリストロジヤ』 [كتاب أرسططليس] [كتاب أثولوجيا] [神学の書] に基づき、これがアラビア世界ではアリストテレス著であること疑い無しであったからである。まず「世界の永遠」 (ウーラノス) でアリストテレスが、「… 生成 [・誕生] したのでもなく、この 全 天界 は、また消滅不可能、… そうではなく唯一で 永遠、始源も 終焉も 持たぬ、全 永劫より、かつ自身の中に 無限 の時間を有し内包している。」 (2・1 : 283B26-29) [...] οὐτε γέγονεν ὁ πᾶς οὐρανὸς οὔτ' ἐνδέχεται | φθαρῆναι, [...], ἀλλ' ἔστιν εἰς καὶ | αἴδιος, ἀρχὴν μὲν καὶ τελευτὴν οὐκ ἔχων τοῦ παντὸς αἰώνος, | ἔχων δὲ καὶ περιέχων ἐν αὐτῷ τὸν ἄπειρον χρόνον, [...]】、と記した所を al-Farabi は留意しながらも (S.36f.)、やはりアリストテレス『神学』を楯に取り、プラトーン同様「アリストテレスが、この Welt aus dem Nichts (世界

を無から）呼び起こしたSchöpfer（創造神）を採用している事はnicht zweifelhaft（疑い得ない）」(S.37)と結論する。確かに『アリストテレス 神学』終結部（第10書）には、【شی[何かが]یکن[在った事]لِم[無し]】(原典169頁17/独訳168頁)【 [...] der Schöpfer [...], es gab ja Nichts, bevor er die Dinge hervorrief, [...]】と、Creatio ex nihilo（無からの創造）が明言されている。これは正にプラトーン著『ティーマイオス』48A (Tom.10. p.165; Bd.7. S.82)で述べられた眼目、「ἀνάγκη（必然 ἀδράστεια 不可避）と νοῦς（叡智・知性）との σύστασις（対立相克ある）一体化」の軽視であり、『ティーマイオス』で「全生成の ὑποδοχή受容者」(49A : p.167; S.86 : πάσης εἰναι γενέσεως ὑποδοχὴν)「母 かつ受容者 … 不可視 で 無形 の εἶδος 種 、万物の容器」(51A : p.170; S.92 : μητέρα καὶ ὑποδοχὴν [...] ἀνόρατον εἶδός τι καὶ ἀμορφον, πανδεχές) と言われる ūλη（質料：materia）の側の شی（何か）の「必然・不可避」を物ともせず、[唯一]神論の絶対者で全て乗り切る「神の摂理（πρόνουα：providentia）」本位の思想である。これを尖鋭化し、西方ラテン語圏の護教家Augustinusは『告白：Confessiones』11・5・7で神に向かい、「造ったのだ、汝がmateria（質料）を」(fecisti, tu materiam : PL. Tom.32. Col.812)と公言する。

他方アリストテレス同様プラトーンを重視するアラビア哲学は、むしろ重心を εἶδος（形相）や ιδέα（理念）に置き、『プラトーンとアリストテレスの調和』終結部(S.50-51)でal-Farabiは、前掲『アリストテレス 神学』第1章を引用し、可能態に在る受動的な質料（ūλη 質料：materia）から 離在（χωρίς離在）し、[能動現実態（現実態）に在る叡智（叡智・知性）] や形相（形相εἶδος：forma）を目指す。これは上掲の「[靈]魂の本質に関する追求かつ探求を、かつ崇高な至高の世界への上昇への熱望を、かのヘーラクレイトスは命じた」の箇所である。「νοῦς χωριστός：離在χωρίςの叡智」を廻り、当然『パайдーン』67Cの τὸ χωρίζειν（離在させる事）も無視出来ない。「[清浄・]純粹化καθάρσις は … 出来るだけ σῶμα（肉体・物体）から[靈]魂を離在させる事」【Κάθαρσις [...] τὸ χωρίζειν ὅτι μάλιστα ἀπὸ τοῦ σώματος τὴν ψυχήν,】(Bd.3. S.34/S.35)【Reinigung [...] , daß man die Seele möglichst vom Leibe absondere】とプラトーンは刑死直前のソクラテースに語らせている。つまり「離在」は「純粹化」に他ならず、エックハルトが『説教28』で「偉大な神学者プラトーン」(Werke I. S.322)に関し重視した lüterkeit（純粹性）と、abegescheidenheit（離在）は既にプラトーン哲学において相互に親密に結び付き、かつエックハルトの思想の双璧をも成している。そこで彼の「純粹な離在（lüteriu abegescheidenheit）」(Werke II. S.434)に至る過程で、1260年頃誕生の彼が活用できた公刊1268年のプラトーン学派の成果、終結部（命題209）で「諸[靈]魂の様々な純粹化」([...] ψυχῶν, [...], τῶν δὲ τὰς καθάρσεις)を話題にしているプロクロス著『神学綱要』：Στοιχείωσις θεολογική』(Πρόκλου διαδόχου Στοιχείωσις θεολογική edidit E.R. Dodds. Oxford. Clarendon 1933. Editio secunda. 1963. Pagina 182)も瞥見の価値が有ると思われる。既に『パайдーン』67Cで動詞不定詞を名詞化した τὸ χωρίζειν（離在させる事）を確認したが、これに対応するのが『神学綱要』命題186、「すべて ψυχή[靈]魂は非物体[・肉体]的 οὐσία（実体・本質・真実在）で、σῶμα（物体[・肉体]）から χωριστή（離在的：chooristee）である。」(Pagina 162)で、更に ψυχή[靈]魂から叡智が χωριστός（離在的）で、かつ叡智から τὸ ἐν（一者）が χωριστόν（離在的）となる。「その第一始源者自体は叡智から χωριστόν（離在的）である」(『神学綱要』命題161: Pagina 140)【αὐτὸ δε τὸ πρώτος ὁν χωριστόν ἐστιν ἀπὸ τοῦ νοῦ,】。この χωριστόν（離在的）は、プローティーノスの『エネアデス』5・1・10、「οὐ（存在：真実在οὐσία）の τὸ ἐπέκεινα（彼方）が τὸ ἐν（一者）で、… 次が ὁν（存在：真実在οὐσία）と叡智で、第三が ψυχή（[靈]魂）の φύσις（本性）であり、…」(Bd.1. S.232)で語られた ἐπέκεινα（彼方）に呼応し、この際 τὸ ἐν（一者）を振り返り観るのが、「純粹叡智（καθαρὸς νοῦς）」に他ならない。【καθαρῷ τῷ νῷ τὸ καθαρώτατον θεᾶσθαι καὶ τοῦ νοῦ τῷ πρώτῳ.】(Bd.1. S.178:『エネアデス』6・9・3)。そして根源一者と叡智の繋ぎが、『エネアデス』5・1・7で ὄρασις（瞥見：Erblicken : S.225）と言われている叡智自体、及び叡智の働き、即ち ἐπιστροφή（振り向く事：回向：回帰）で、これが言わば νοήσεως νόησις（思惟[の中]の思惟）と考えられる。「だが叡智ではない、かの者は。如何にして全体それが νοῦς（叡智）を発生[・誕生]させるのか？さて、[それは]自身の方へ ἐπιστροφή（振り向く事）で、[それが自身を]観た事においてであり、この ὄρασις（瞥見）、これが叡智である。」【ἀλλ οὐ νοῦς ἐκεῖνος πᾶς οὖν νοῦν γεννᾷ; ἦ ὅτι τῇ ἐπιστροφῇ πρὸς αὐτὸ ἐώρα, ἦ δὲ ὄρασις αὕτη νοῦς.】(Bd.1. S.224)。

プラトーン自身と彼の学派は、哲学者の中の哲学者ソクラテースを ὄρασις（瞥見：Erblicken）し、彼の方

へと ἐπιστροφή (振り向く事) で思索への道を辿り始める。アリストテレスの『形而上学』は、このような邂逅を導きの星としていない。その νόησεως νόησις (思惟の思惟 : 純粹思惟) は、むしろ探求に専念し精神集中し物に打ち込む研究 ἐνέργεια (活動 [現実態]) だと考えられ、これが θεωρία (觀想) だと思われる。「… ἐνέργεια (活動 [現実態])。… [16] [17] … ἡ τελεία εὐδαιμονία (究極の幸福)。… [17] [18] … θεωρητική (觀想 θεωρία の[活動 ἐνέργεια]) …」 (『ニコマコス倫理学』10・7 : 1177A16-18)。諸説教でエックハルトが先達の中の先達イエスを具体的な範例として再三問題にするのに対し、トーマースは『神学大全』で全体アリストテレス風研究 ἐνέργεια (活動) に倣うのを旨としており、例えば前掲『諸原因論への註解』: In Librum de Causis』(1269年) 冒頭で、只今触れた『ニコマコス倫理学』10・7 (1177A16-18) を鑑みて述べる。「哲学者[中の哲学者アリストテレス]が『倫理学』10で言っている様に、人間の ultima felicitas (至福: τελεία εὐδαιμονία : 究極の幸福) が在るのは、人間の最善の働きの中であり、これは至高の能力である intellectus (叡智) の働きであり、最善の叡知的存在を考慮している。」 (Opera omnia. Vol.4. Pagina 507 左) 【Sicut philosophus dicit in x ethicorum, ultima felicitas hominis consistit in optima hominis operatione quae est supremae potentiae, scilicet intellectus, respectu optimi intelligibilis.】他方エックハルト同様ギリシア正教会筋では新プラトーン学派の息吹を伝える上記『ディオニュースイオス文書』が格別に尊重された結果、例えば東方ギリシア教父 Παλαμᾶς [Palamas] は、1338年頃の三部作『聖なる静寂主義者達に関する弁護』 (Grégoire Palamas: Défense des saints hésychastes. Jean Meyendorff 編. Spicilegium Sacrum Lovaniense. Fasc.31. 1959年・再版1973年) 第1部・第3問・第20節 (p.153) で、ディオニュースイオスの『神名論』第7章・第1節 (PG. Tom.3. Col.865C) から、「叡智の本性 φύσις を超越する[協和一致]の合一性 ἐνώσις [Unio mystical]、これにより叡智は、叡智の諸 ἐπέκεινα 彼方へと結び付けられる。」【ἐνώσις ὑπεραίρουσα τὴν τοῦ νοῦ φύσιν, δι’ ἣς συνάπτεται πρὸς τὰ ἐπέκεινα ἑαντοῦ.】と引用し、更に第21節 (p.155) で「魂の情感 πάθος 部分の 清淨 [=純粹化 κάθαρσις] … 全てから叡智を χωρίς 離在してしまう」【καθαρότης τοῦ παθητικοῦ μέρους τῆς ψυχῆς, πάντων [...] χωρίσασα τὸν νοῦν】と述べ、χωρίς 離在を ἐπέκεινα 彼方と共に叡智を超える方向で理解してゆく。これに対し、「神」を「Intellectus (叡智) 的[認識]能 力 の創出者」 (auctor intellectivae virtutis) とか「第一の叡智」 (primus intellectus) と規定する13世紀の『神学大全』第1部・第12問・第2項 („Summa theologiae“ Prima Pars 1265-1268. Lateinisch/Deutsch von Dominikanern und Benediktinern Deutschlands und Österreichs. Bd.1-8. Graz. Styria 1934-1951. Bd.1. Quaestio 12. Articulus 2. S.210) は、アリストテレス風の叡智[・知性]に重心を置く。そして実は同旨を既に10世紀al-Farabiが『العقل [叡智]に関する論文』 (Texte arabe intégral en partie inédit établi par Maurice Bouyges. Deuxième édition. Beyrouth. Dar El-Machreq Sarl 1983. 3頁・36頁) 終結部 (亜語原典 35頁 14-36頁 3 / 羅訳 Alpharabius «De intellectu et intellecto»: 初版«Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyenâge» 4. 1929 ; 再版«Les Sources gréco-arabes de l'Augustinisme avicenniant, par Etienne Gilson» Paris. J. Vrin 1986. 115頁-126頁) で「可能態に在る叡智」と現実態に在る叡智 [and the actual intellect] と獲 得 収智 [and the Intellectus actualis] と能動 収智 [and the Intellectus agentis] (亜 12 頁 5 : 羅 117 頁 : Unus est intellectus in potentia, alius intellectus in effectu, alius intellectus adeptus, alius est intelligencia agens) を明示し、「その全諸原理の [始源] 原理 (principium omnium principiorum)、かつ [始源] 原理 (principium principiorum)、かづ [始源] 原理 ([14] [15] その全 [諸存在者] の第一 [始源・原理] : principium primi [異本 primum] eorum que sunt)、そして当の [これ] は叡智で、即ちそれ [the intellect] それを語っている (ذكره) アリストテレスが [アリストテレス] (卷) (アーリンハーフ・ワード [ラムダム・ダ・ハルフ] (で) (即ち) 『自然[学]の後の書 (=形而上学書) 中の (卷) で) (アリストテレス) (アリストテレス) が語っている) [العقل] [叡智] : intelligencia : 収智 voūς である] [hoc est intelligencia quam ponit Aristoteles in littera in libro de metaphysica.]」と、更に「これ [هو] が第一の叡智 (العقل)、かつ第一の存在者 [الواحد] [الوجود الالى] の (一者)、かつ第一の真実 [الحق] [il est intelligencia prima et primum quod est et verum primum et unum primum,]」 (羅 126 頁) と述べている。

他方エックハルトが彼の『説教28』で焦点を当てたのは (Werke I. S.322)、*Plátō, der grôze pfaffe* (偉大な神

学者プラトーン) 風 *iδέα* (理念) の結晶が放つ *lúterkeit* (純粹性) の光輝であり、その目指す先は *Intellectus* (叡智) をも超えた *daz eine* (一者: *tό εν*)、即ち *in im selben quellende* (そのもの自体で湧き溢れる者) に他ならない。勿論「プラトーンとアリストテレスの協和・一致」が彼らスコラ哲学者の念頭にあることは確かであるから、彼らの力点の置き所の相違にばかり注目しないで、むしろ共通の地平を切り開くことも必要である。その一つが当面の *ἐπέκεινα* (彼方) と *χωρίς* (離在) の共鳴による「プラトーンとアリストテレスの協和・一致」である。逆に、こここの軸が外れると、後者は「*Noologisten* (叡智[・知性]論者達) の頭目」から「*Empiristen* (経験論者達) の頭目」に転ずる事と成り、「アリストテレスが、*Empiristen* (経験論者達) の頭目と、他方プラトーンが *Noologisten* (叡智[・知性]論者達) の頭目と看做され得る。」(Bd.3. S.551:『純粹理性批判』再版 882 頁) と評される。確かにカントの言う様に、観察や実験や経験を重視する自然科学の元祖アリストテレスが、「*Empiristen* (経験論者達) の頭目と看做され得る」ことにも一理ある。ところが自然科学の書物を読んでも、トーマース達スコラ学者の目の付け所は別の所にあった。例えば『神学大全』第 1 部・第 118 問・第 2 項で彼は、アリストテレスの『[諸]動物生成〔誕生〕論 (Περὶ Ζώων γενέσεως)』第 2 書・第 3 章、「残る[結論]は、唯 *intellectus*のみが *θύραθεν* (外から) 到来し、*θεῖος* (神的) なのは唯これのみ。」【λείπεται δὲ τὸν | νοῦν μόνον θύραθεν ἐπεισέναι καὶ θεῖον εἶναι μόνον】(736B27-28) に着目し、この「唯 *intellectus* (叡智 *voūς*) のみが *deforis* (外から *θύραθεν*)」を重視している。「明らかなのは他方、*intellectus* (叡智) の *principium* (原理) は人間の中において、*materia* (質料) を超越した原理である。… 故に哲学者[の中の哲学者アリストテレス]は言う。『残る[結論]は、唯 *intellectus* (叡智 *voūς*) のみが *de foris* (外から) 到来する。』【Manifestum est autem quod principium intellectivum in homine est principium transcendens materiam; [...] Et ideo Philosophus dicit: „Relinquitur intellectum solum de foris advenire.“】(„Summa theologiae“ Prima Pars. Bd.8. Quaestio 118. Articulus 2. S.300)。命題「唯 *intellectus* (叡智 *voūς*) のみが *deforis* (外から *θύραθεν*)」(『[諸]動物生成論』2・3: 736B27-28: τὸν | νοῦν μόνον θύραθεν) は、「*voūς* *χωριστός* (nous choristos) : 離在 *χωρίς* の叡智 *voūς*」(『[靈]魂論』3・5: 430A17) の由来を良く物語っている。これを新プラトーン学派なら「一者から」と明言するが、アリストテレスはこれ以上述べない。一つの理由は彼が *χωρίς* (離在) の *ἐπέκεινα* (彼方) に疑念を抱いている故と考えられる。「… 即ち諸 *iδέα*理念へと眼指を向け *tό* *ἐπργάζομενον* (造る者: 上記 *δημιουργός* 造物主:『ティーマイオス』41A) は誰か? [実際その頭や心の中の叡智 *voūς* の思惟の中に理念が在るのではないか?] 結果かくして同じものが、*παράδειγμα* (範例) かつ [991A/B] *εἰκὼν* (似姿) となる。なお不可能と考えられるのは、眞実在 *oὐσία* (実体) と、この眞実在が (生じる) 所 (の事物) が *χωρίς* (離れて) 在 [る] と言う点で、かくして如何にして諸 *iδέα*理念が、諸事物の *oὐσία* 真実在であり、かつまた *χωρίς* (離在) なのか?」【...】*παράδειγμα* καὶ [991A/B] *εἰκὼν* [...] ὥστε πῶς ἀν αἱ *iδέα* *oὐσίᾳ* τῶν πραγμάτων *oὐσίᾳ* *χωρίς* εἰσεν;】(『形而上学』第 1 書・第 9 章: 991A-B)。これは彼の初期の未熟な考え方であるとか、また彼以上に *Empirist* (経験論者) であった弟子「*Θεόφραστος* (Theophrastos) の加筆」として、上記ツュルヒャー (Hirschberger) 『哲学史』Bd.1. S.160) の様に、片付けることも出来よう。少なくとも第二の師 *al-Farabi* 達アラビア思想家やスコラ学者エックハルト達は、こうした反プラトーンの側面より、むしろ *iδέα*理念 (*εἰδος*形相) 論者として「諸先師の最高 *Aριστοτέλης* アリストテレス」(Werke I. S.178) を自分達の思想圏に取り入れた模様である。

そこで「唯 *intellectus* のみが *θύραθεν* (外から) 到来」(736B27-28) の解釈であるが、アリストテレス風トーマースと異なり、新プラトーン学派に一層親しんだエックハルトは、ここに下記 *ἀπόρροια* (流出: *Emanatio*) を認めると共に、同時に流出の源泉へ向け止むこと無き理念追求を敢行するであろう。この事は彼が『集会[の書]』24・25-31 に関する *Sermones* (諸説教) と *lectiones* (諸講解) 等で好んで引用する『秘密の書』所収『シラク *Σιράχ* [の] 知恵 *Σοφία* [の書]』(Σοφία *Σιράχ*: Siracides:『集会[の書]』Liber Ecclesiastici) 【Werke II. S.582: «Sermones» 2.Cor.13.13: qui edunt me, adhuc esurient.】24・21、「我を食する者達は尚飢え、我を飲む者達は尚渴くであろう。」(»Septuaginta« edidit A.Rahlfs 1935. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft 1979. Vol. 2. Pagina 418) 【οἱ ἐσθίοντές με ἔτι πεινάσσουσιν, καὶ οἱ πίνοντές με ἔτι διψήσουσιν.】が良く物語っている。【Qui edunt me, adhuc esurient: et qui bibunt me, adhuc sitient.】(24・29: PL. Tom.29. Col.469C) 【『Ekklesiastikos: 伝道[の書]』(Liber Ecclesiastes)

は別書】。「流出」(ἀπορροή)と言えば、まず『エネアデス』に「かの[一]者から[美の] 流出[物]」(ἐκεῖθεν ἀπορροή)」6・7・22 (Bd.3. S.306) とか「[唯]一なる源泉から流出(όφη ἐκ μαῖς πηγῆς)」6・7・12 (Bd.3. S.280) があるが、この鍵語は既に言及した『国家』6・19 (508B-C) で、<sup>ボリーティア</sup> 善の理念が精神界の日輪<sup>タガト</sup>ヘーリオス、<sup>スース</sup>叡智<sup>voūς</sup>が精神界の視覚<sup>ψηψις</sup>に相当すると、光明の比喩で語られていた所に「流出(ἐπιφυτον)」(508B : Tom. 7. Part.1. p.137; Bd.4. S.540/S.541)【Ausfluß】と出ている。これが影響した古代汎神論や観知主義等の遺産『ヘルメース文書』10・4でも、「叡智界の光輝の流入(ἐπεισροή τῆς νοητῆς λαμπτόνος)」(Corpus Hermeticum : Hermès Trismégiste. Collection Budé. Tome I. 1946/ Tome II. 1946/ Tome III. 1954/ Tome IV. 1954. Les Belles Lettres 1983. Tome 1. p.115) と、更に 10・16 では「叡智は[靈]魂から離在する(ó νοῦς τῆς ψυχῆς χωρίζεται)」(Tome 1. p.121) と、話題の<sup>コリス</sup> χωρίς(離在)も俎上に載せられている。さて同じ古代ギリシア語文献であるが、むしろエックハルトに重要なのは、『聖書』関連文献『秘密の書(Απόκρυφα:Apocrypha)』(旧約聖書・外典)で、この中の『知恵Σοφία[の書]』(Σοφία Σαλωμῶνος : Liber Sapientiae) 7・24-26 が瞠目すべき ἀπόρροια εἰλικρινής(エイリクリネス・アボロイア 純粹な流出)を語っている。「知恵は、… [24|25] 即ち、神の威力の息吹、全能者の栄光の純粹な流出、故に何ら汚穢はその中に<sup>ソビア</sup> 浸入せず、[25|26] 即ち、永遠なる光明の玉輝、神の働きの曇り無き鏡、神の善性の似姿」(»Septuaginta« Vol.2. Pagina 355) 【[...] σοφία, [...] ἀτμὶς γάρ ἐστιν τῆς τοῦ θεοῦ δυνάμεως καὶ ἀπόρροια τῆς τοῦ παντοκράτορος δόξης εἰλικρινής: διὰ τοῦτο οὐδὲν μεμαμένον εἰς αὐτὴν παρεμπίπτει. | ἀπαύγασμα γάρ ἐστιν φωτὸς ἀιδίου καὶ ἔσοπτρον ἀικνητίων τῆς τοῦ θεοῦ ἐνεργείας καὶ εἰκὼν τῆς ἀγαθότητος αὐτοῦ.】。これを引用している『ヨハネ福音書註解』第 27 節で彼は、「ところで似姿に関する上記の諸事は『知恵[の書]』7 で簡明に要約されている」と前置きしている。【Ista autem quae de imagine dicta sunt, aperte colliguntur Sap. 7, ubi dicitur de sapientia sive verbo dei quod est »speculum sine macula«, »emanatio «dei sincera». Item quod est »imago bonitatis illius«, et quod »nihil inquinatum incurrit in illam«. Item quod est »vapor virtutis dei« et »candor lucis aeternae.】(Werke II. S.510)

【引用は illam が『流布本Vulgata 聖書』(PL. Tom.29. Col.434B) では eam と違うだけで大同小異】。話題の「神の善性の似姿」、即ち『創世記』1・26-27 (Vol.1. Pag.2 : PL. Tom.28. Col.197- C) に言う εἰκὼν(似姿)と ομοιώσις(類似) (similitudo) : プラトーンの『Θεαίτητος: Theaitetos』176B (Bd.6. S.106 : Tom.8. Part.2. p.208) の ομοιώσις(神に類似)の方をアラビア思想は重視】と εἰκὼν θεοῦ(神の似姿:imago Dei:)が「知恵」として emanatio(流出)する。これを第 8 節 (S.494) でエックハルトは、processio sive productio et emanatio(発出や産出と流出)と併記し、教会筋の用語である「発出や産出」と通底する意味で「流出」を取り込んでいる。当然 χωρίς(離在)の ἐπέκεινα(彼方)から「発出 processio・産出 productio・流出 emanatio」し、再び離在の彼方へ ἐπιστροφή(回帰)する。この基調は『アリストテレス神学』第 10 書にも、【一者、純粹な[一者]が、… 諸[事物]はそれら全て専ら<sup>クル</sup> インナーイ<sup>ンバ・ジャサット</sup>[外へ流出する]、 منه[それから]。 … وآلية<sup>ワ</sup>[かつそれへ]<sup>ライ・ヒ</sup> مرجعها<sup>ハ</sup>[それら諸[事物]の帰還]。】(原典 136 頁 5-6 / 独訳 137 頁)【Der Eine, der Reine! [...] alle Dinge quellen nur aus ihm hervor; [...] und zu ihm geht ihre Rückkehr.】と明記され、第二の師 al-Farabi の『優良都市の住民の見解に関する論文』第 7 章 (原典 15 頁 13 / 独訳 23 頁) でも、こうした「流出」(فیض: Erguss) が重視され、この伝統は前述 Avicenna の『形而上学』(الاعیان: アウケンナ) にも継承されている (上掲 Liber de philosophia prima sive Scientia divina. 本文 429/449 頁 / 辞典 99/225 頁 : <sup>ファイード</sup> فيض[流出] / fluere, fluxus)。

Forschungsberichte der Universität Kōchi (=Kōtzcshi). Vol.61. Geisteswissenschaften. Japan 2012 ;

Bulletin annuel de l'Université de Kōchi (=Kōtchi). Tome LXI. Sciences humaines. Japon 2012 :

Manuscriptum receptum: die 20 Septembris anno 2012  
 Editum pronuntiatum: die 31 Decembris anno 2012  
 平成24年 (2012) 9月20日受理  
 平成24年 (2012) 12月31日発行